

### 正教聖歌の伝統 第3回 「時」の祈り、「時の成聖の祈り」

教会の祈りの中心は、主イエスが制定された「聖体礼儀」ですが、それとは別に、毎日の生活、毎日の時間を「聖なるもの」とする「時」の祈りがあります。家庭の祭壇の前で祈る、朝夕の祈りもそうですし、修道院などで「時課」「日課」と呼ばれる祈りもそうです。今日はその「時」の祈りについてお話しします。中でも、晩の祈りで歌われる、最も古い聖歌、「聖にして福たる」を取り上げます。

#### Slide 2 時の祈り 時間を決めて祈る

「時間を決めて祈る」ことはユダヤ教の時代から引き継いだ伝統です。イエスの頃、ユダヤ人たちは一般に、朝と晩の一日二回、あるいは朝、昼、晩と一日三回、祈りの時間を決めて祈っていました。中でも、朝と晩、夜明けと日没の時間は特に重要な祈りの時間でした。

#### Slide 3 イエス祈る

ただ、イエスは、祈りは日に2回3回で十分とは考えておらず、「常に祈りなさい」と言いました。ご自身も、朝早く暗いうち、とか、夕方の前とか、一晩中祈っておられた様子が聖書に書かれています。

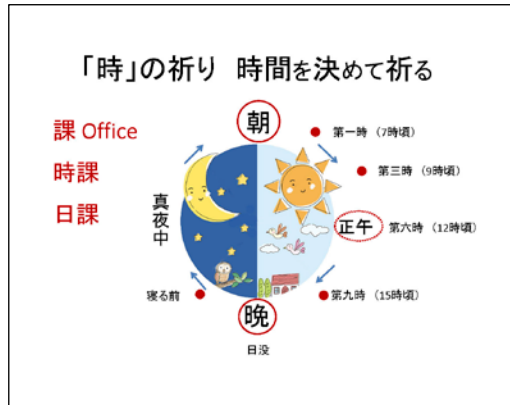
#### Slide 4 初期の教会では

使徒行実には聖使徒ペトルが第6時（正午頃）祈っていたと伝えられますし、夜中に祈っていたという記述もあります。

#### Slide 5 パウエル

聖使徒パウエルはテサロニケの教会への手紙で「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。（2テサロニケ5:16-18）」と教えました。ディダケー『十二使徒の教訓』という、1世紀、西暦100年より前に書かれた古い祈りの手引き書にも、日に3回「天にいます」を唱えなさいとあります（8章）。クリスチャンたちはだいたい、日に3回と食事の集まりの時に祈るが標準だったようです。

<http://www.maroon.dti.ne.jp/gokyo/savebox/didache.ht>



- 朝早くまだ暗いうちにイエスは起きて人里離れた所へ出てゆき、そこで祈っておられた。(マルコ 1:35)
- 群衆と別れてから、祈るために山に行かれた。夕方になると・・・(6:46)
- イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。(ルカ 6:12)

### 初期の教会では・・・

- ペトルは第6時(正午)に祈っていた。(使徒行実 10:9)
- ペトルはマルコと呼ばれていたイオアン之母マリアの家に行った。そこには大勢の人が集まって祈っていた。(行実12:12)

### 聖使徒パウエル(?-65頃)

- いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。(2テサロニケ5:16-18)
- 日に3回祈っていた。(ディダケー AD100以前)

ml

どんなふうに祈っていたのか、内容はわかりませんが、即興で祈ったり、歌ったりしていたと考えられています。

### Slide 6 3世紀頃

3世紀には朝晩に加えて、第3時、第6時、第9時に祈る習慣ができました。正教会のみなさんは「第何時に」とか「何時課」という言い方を聞いたことがあると思いますが、これに、だいたい6時間を足すと今の時間になります。だから今の時間に直すと、第3時は朝9時、第6時は正午、第9時は午後3時頃です。ローマ帝国内では時間の区分があり、この時刻には、休憩時間があったそうです。だから「いつも祈りなさい」は「できるときに、祈りなさい」という意味でした。

また、時間に対してキリスト教的な意味づけも行われるようになって、たとえば、テルトリアヌスという師父、神父は、第3時は聖神降臨の時間、第6時は使徒行実にあるようにペトルが昼に祈った時間、第9時はペトルが中風の人を癒した時間と説明しています。

### Slide 7 聖詠と歌頌と属神の詩賦

このころから時の祈りに聖詠、詩篇が多く用いられるようになります。

前回、パウエルのエフェスの信徒への手紙にある「聖詠と歌頌と属神の詩賦を以て主を賛美せよ。新共同訳だと詩篇と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」の三つの歌の種類は、前回、パウエルの時代には区別されていなかったとお話ししました。区別が出てくるのはこの頃からです。聖詠とは旧約聖書の詩篇に加えて、モーセの歌とかハンナの歌とか旧約聖書の歌が含まれていました。聖詠経、Psaltery 詩篇集に収録されました。

二つ目、正教会では歌頌、一般にさんびとか賛歌とか言われるのが、ギリシア語でイムノス（英語の hymn の語源です）です。聖書の引用ではない、創作された歌を指しま

**3世紀頃**

- 朝 色々な解釈がつけられた  
たとえば(テルトリアヌス)
- 晩
- 第3時 聖神降臨
- 第6時 ペトルが正午に祈った
- 第9時 ペトルが中風の人を癒した

**聖詠と歌頌と属神の詩賦を以て主を賛美せよ**  
詩篇と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい  
(エフェス5:19 コロサイ3:16)

聖書の時代—あまり区別なし 後代には区別される

- ◆聖詠 聖詠／詩篇+旧約歌頌  
Psalms 本: Psaltery(聖詠経／詩篇集)
- ◆歌頌 イムノス、創作された歌 (トロバリなど)  
HYMNS さんび／賛歌
- ◆属神の詩賦 霊の歌 (喜びの歌) (アレルイヤなど)  
SPIRITUAL SONGS

す。正教会はこのイムノスの数が膨大です。『八調経』とか『三歌斎経』とか『祭日経』とか、正教会の分厚い祈祷書、歌の本に納められています。トロパリやコンダクやカノンはすべてイムノスです。

### Slide 8 4世紀、聖詠が時の祈りの中心になった

初代教会の時代には祈りも歌も即興でした。インスピレーションを受けた人が、立ち上がって、自由に祈ったり歌ったりしていました。ところが4世紀になると、即興で歌ったり、祈ったりすることが禁止されました。創作の歌、イムノスも禁止されました。なぜかというと、異端の問題が出てきたからです。特に「グノーシス」と呼ばれる人たちは、歌を作ることに長けていて、自分たちの教えを歌にしてプロモートしました。また旧約聖書を軽んじ、聖書ではないと言う人もありました。そこで363年ラオディキアの公会で、「教会で正しいとされていない歌を歌ってはならない。教会の祝福した人以外は勝手に壇上で歌ってはならない。新旧約聖書の正典のみ」と決めました。その分、聖詠、詩篇の重要性が増しました。結果として、3世紀以前の古い歌の大半が失われました。今も歌い続けられているのはごく僅かです。

ごく僅かの古い歌の代表が、朝の祈りの歌「大頌栄／大詠唱」と、晩の祈りの歌、フォス・ヒラローン「聖にして福たる」です。晩の歌「聖にして福たる」は正教会ですが、朝の祈りの歌、「大頌栄」はカトリックではグロリア、「栄光の賛歌」といいます。

### Slide 9 大頌栄、グロリア

大頌栄の前半部分とカトリックのグロリア「栄光の賛歌」はほぼ一致しています。赤字にしたところだけ、ちよっと歌詞が異なりますが、ほぼ同じです。カトリックではミサ（私たちの言う聖体礼儀）の始まりに歌われますが、正教会では聖体礼儀ではなくて、「時」の祈り、朝の祈り、早課で歌われます。大頌栄の「頌栄」の意味については前回お話ししました。

4世紀頃

- ☆聖詠／詩篇が広く用いられる。
- 聖詠経(詩篇集)は「時」の祈りの基本的な本。
  
- イムノス(創作の歌)が排除された。  
ラオディキアの公会第59条(363)
- 聖書以外で残ったのはごくわずか
- 大頌栄(大詠唱) グロリア
- フォス・ヒラローン「聖にして福たる」

<p><b>大頌栄 グロリア</b></p> <p>至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、<b>人には恵臨めり</b></p> <p>主天の王、神父全能者よ、主独生の子イエス・ハリストス、及び<b>聖神よ</b>、爾の大なる光栄に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め擧げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。</p> <p>主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の禱を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は独聖なり、爾は独主イエス・ハリストス、神父の光栄を顯す者なればなり、「アミン」。</p>	<p>天のいと高きところには神に栄光、地には<b>善意の人に平和あれ</b>。</p> <p>われら主をほめ、主をたたえ、主を拜み、主をあげ、主の大いなる栄光のゆえに感謝し奉る。神なる主、天の王、全能の父なる神よ。主なる御ひとり子、イエス・キリストよ。</p> <p>神なる主、神の小羊、父のみ子よ。世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ。</p> <p>世の罪を除きたもう主よ、われらの願いを聞き入れたまえ。</p> <p>父の右に座したもう主よ、われらをあわれみたまえ。</p> <p>主のみ聖なり、主のみ王なり、主のみいと高し、イエス・キリストよ、聖霊とともに、父なる神の栄光のうち</p> <p>に。アーメン。(カトリック教会)</p>
--	--

### Slide 9 日暮れの歌、夜明けの歌

朝に相応しい聖詠も選ばれていきます。朝の聖詠の代表は「天より主を讃め上げよ」あるいは「凡そ呼吸ある者は主をほめ上げよ」で始まる 148、149、150 聖詠で、「ステイヒラ」という歌を挟み込んで歌われて、そのあと王門が開いて「大頌栄」が歌われます。

晩に歌われる聖詠の代表は「光の詩篇」と言われる、第 140、141、129、116 聖詠「主や爾に呼ぶ」で、やはりステイヒラを挟み込んで歌って、王門が開いて、灯りがついて、「聖にして福たる」が歌われます。このように聖詠をテーマ的に選んで用いるのは街の教会、大聖堂の伝統です。修道院、砂漠の修道院の伝統は異なります。それについてはまた改めてお話ししましょう。

### Slide 10 時課、聖務日課

さて、時の祈り「時課」ですが、カトリックでは聖務日課（、聖公会では時祷と言います。正教会で、時課というとき一時間とか三時間とかだけだと思っっている方がありますが、時間を決めて祈ることすべてが時課です。時課の「時」は時、時間ですが、課は英語でいうオフィス、「お勤め」です。今はオフィスという仕事や職場を考えますが、もともとは教会の決められた時間の祈り、「お勤め」のことでした。古いロシア文学とか読むと「勤行」なんて訳されています。時課経の経は、それに用いる祈禱書で、ギリシア語でホロロギオン、ロシア語ではチソスラフと言いますが、いずれも「時間の祈禱書」の意味です。私たちの使っている『時課経』は、7 世紀までにパレスティナの聖サワ修道院でできあがった聖詠の祈り方がもとになっています。聖詠の枠にイムノス「創作の歌」を挟み込んで「課」が作られます。

### Slide 12 時課 一日

今も正教の修道院では『時課経』に従って「時」の祈りを行います。一日に 8 つの祈りの時間があります。晩課から始まって、晩堂課、夜半課、早課、一時課、三時課、六

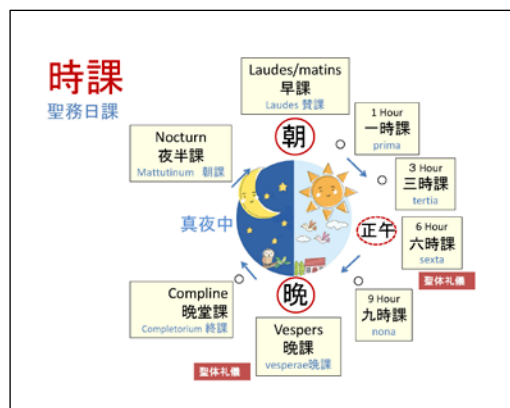
<b>日暮れ</b>  <b>灯火</b>	<b>夜明け</b> 
<b>晩課</b> 聖詠(詩篇) 140、141、129、116 「主や、爾によぶ」の ステイヒラ  聖にして福たる フォス・ヒラローン	<b>早課</b> 聖詠(詩篇) 148、149、150 「凡そ呼吸あるもの」の ステイヒラ  大頌栄/大詠唱 グロリア 栄光の賛歌

時 課 聖務日課／時祷  
(教会の祈り)

**時** 時間

**課** OFFICE お勤め

**経** 祈禱書 Horologion



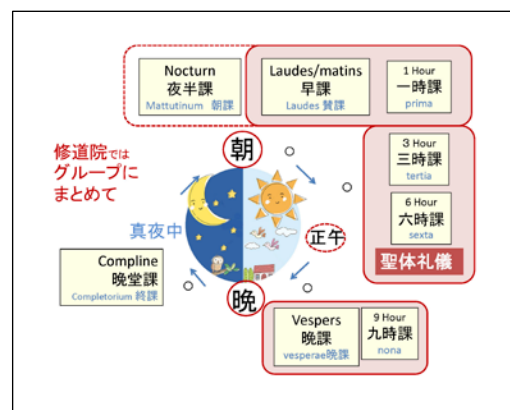


時課、九時課で一日が終わります。カトリックにもかつては7つの「課」がありました。今は随分簡略化されて、「教会の祈り」というそうです。

ここで注意したいのは、聖体礼儀は特別で、この時間の枠には入りません。聖体礼儀は「時」を超えているので、このサイクルには入りません。通常、三時課と六時課の後、特別の場合には、晩課のあと行われることもあります。

### Slide 13 まとめて

一般の教会では時課の祈りを毎日行うことは無理ですが、修道院では毎日「時の祈り」を行います。むしろ時課の祈りが中心です。ただいくら修道院でも、昼間は農作業とかの労働もあり3時間ごとに聖堂に集まって祈るのは無理ですから、いくつかまとめて、グループに行ないます。私の行った修道院では、4時頃から、早課、一時課、三時課、六時課から聖体礼儀、終わるのが朝の7時か8時で、夕方また集まって、九時課から晩課を行う場合が多かったように思います。夜中すぎに夜半課から行うところもありました。



### Slide 14 晩課 灯火の祈り

さて、晩の祈りの話に戻ります。晩課は朝の早課と並んで、「時」の祈りの中でも重要な「課」です。ユダヤ教や正教会の一日の始まりは日没です。夕暮れに灯火を灯す祈りはユダヤ教の時代からの伝統です。ユダヤ人たちは夕暮れに、幕屋で灯火をともして、香をたいて、特別の祈禱を行うように命じられていました。出エジプト記には「夕暮れに、灯火をともすときに、香をたき、代々にわたって主の御前に香の献げものを絶やさぬようにする」(30:8)とあります。レビ記にはもっと詳しく具体的に書かれています。

## 晩課

**日没 一日の始まり**  
 -灯火をともし祈り ユダヤ教からの伝統

「夕暮れに、灯火をともしときに、香をたき、代々にわたって主の御前に香の献げものを絶やさぬようにする」(出エジプト30:8)。

詳細はレビ記24:1-4

### Slide15 マクリナの祈り

キリスト教でも、灯火を灯して晩の祈りが唱えられていた証拠は、たとえば、ニュッサのグレゴリオスは(335年ごろから394年ごろの人ですが)、姉、聖マクリナの死の時の記述にあります。部屋にランプが運ばれ、マクリナは光

## 聖マクリナの最後の祈り

ランプを見て、じっと見つめ、光への感謝にふさわしい祈りを言おうとした。声がかすかになり、手と唇だけをうごかして、心で祈り終えた。感謝の祈りを終え、十字を描くために手を上げ、最後の深い息をひとつした。彼女の人生は祈りを唱えながら終わった。

への感謝の祈りを唱え、祈りを終え、手を上げて十字を描いて、大きく最後の息をし、永眠した」ようすが書かれています。(聖マクリナの人生 PG46:95)

3世紀のエジプトの史料にも、晩の祈りの集會に灯火を運んで祈ったことが書かれています。

Slide 16 歌詞

歌詞を見てみましょう。みなさんご存じですよ。日本では一般的にこのように歌われています。

フォス・ヒラローン **喜びの光**「聖にして福たる」

聖にして福たる 常生なる、天の父の聖なる光栄の 輝かなる 光  
 イイス・ハリストスや、

我等日の入りに至り、晩の光を見て、神父と子と聖神を歌ふ。

生命を賜ふ神の子や、爾は何時も敬虔の聲にて歌はるべし、故に  
 世界は 爾を 崇め讃む。

聖セイにして福フクたる常ジョウ生セイなる天の父の聖なる光栄のおだやか  
 なる光ヒカリ イイスイススハリスリストス やわれら日の入りに至り暮れの光を  
 見て神カミ父と子と聖神をうと、生命を賜うかみの  
 子やなんじはいつも敬ケイけんケンの聲にて歌ウタわるべしゆえに  
 世界セカイはなんじをあげほむ

Slide 17 ギリシア語対訳

直訳を見てください。ギリシア語と対訳です。

まず、歌の題名はだいたい冒頭のことばになるので、日本語では「聖にして福たる」ですが、ギリシア語ではフォス・ヒラローン「喜びの光」です。「喜びの光よ」とハリストスに呼びかけ、それを修飾する、不死なる父の光栄の、天の、聖なる、祝福された、イイスス・ハリストスよ、と続きます。

フォス・ヒラローン **喜びの光**「聖にして福たる」

Φως Ιλαρόν ἁγίας δόξης ἀθανάτου Πατρός, οὐρανόυ, ἁγίου, μάκαρος, Ἰησοῦ Χριστέ,	歡喜の光よ、 不死(常生)なる父の聖なる光栄の 天の、聖なる、祝福された イイススハリストスよ
ἐλθόντες ἐπὶ τὴν ἡλίω δύσιν, ἰδόντες φῶς ἐσπερινόν, ὑμνοῦμεν Πατέρα, Υἱόν, καὶ ἅγιον Πνεῦμα, Θεόν.	日の入りに至って 暮れの光を見て 我等、讃め歌う、父と子と聖神、神を
Ἄξιόν σε ἐν παντί καιροῖς ὑμνεῖσθαι φωναῖς αἰσίους (στασιμονακ) Υἱέ Θεοῦ, ζωὴν ὁ διδοῦς διὸ ὁ κόσμος σε δοξάζει.	真に当たれり、常に 爾は慶びの聲を持って歌われる 父の子、生命を賜う者 ゆえに世界は爾を崇め讃む。

## Slide 18 喜びの光

運ばれてくる灯火はハリストスを象徴します。喜びの光です。ハリストスはご自身を「世の光」（イオアン 8:12）と呼びました。日暮れにともされる灯火は、ハリストスの記憶です。「真の光、世に来てすべての人を照らす（イオアン 1:9）」として運ばれます。ハリストスは「二人か三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる（マタイ 18:20）」と言われました。だから、晩の祈りの集まりへ、「喜びの光」すなわちハリストスが来られます。それをお迎えする歌です。

日本正教会の歌詞は「穏やかなる光」です。スラブ語も Sveti Tihi 「穏やかな光」です。なぜ「喜びの光」ではなくて、「穏やかなる光」になったのか、調べてみましたがわかりませんでした。「穏やかな光」の解釈としては旧約の時代には顔を見たら死んでしまうとされた神が、人の子となってこの世に来られたことで、顔と顔を合わせ出会えるようになった、「穏やかな光であるハリストス」と説明されます。いずれにしても、「光」、すなわち、ハリストスが来られたことを象徴しています。

## Slide 19 歌詞

次の段落を見ます、日の入りにいたって、暮れの光を見て。この暮れの光は灯火です。闇の中に光る灯火です。私たちは歌う「父と子と聖神、（である）神を」。私たちが賛美を献げるのは父と子と聖神、至聖三者、三位一体の神であることが宣言されます。


## Slide 20 聖大ワシリー

この歌が 4 世紀以前から歌われていたというひとつの根拠になっているのが、聖大ワシリー（330 年頃 - 379 年）のことばです。ワシリーはさきほど紹介した、ニュッサのグレゴリオスやマクリナの兄弟で、4 世紀半ばのカッパドキアの主教です。ワシリーはこの歌を引用して「昔から、父と子と聖神」と歌ってきたではないかと言っています。4

### 喜びの光＝ハリストス

-「わたしは**世の光**である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、**命の光**を持つ。」  
(イオアン8:12)

-**真の光**、世に来て**すべての人**を照らす  
(イオアン1:9)



フォス・ヒラローン **喜びの光**「聖にして福たる」

<p>Φῶς ἱλαρόν ἁγίας δόξης ἀθανάτου Πατρός, οὐρανόυ, ἁγίου, μάκαρος, Ἰησοῦ Χριστέ,</p> <p>ἐλθόντες ἐπὶ τὴν ἡλίω δύσιν, ιδόντες φῶς ἐσπερινόν, ὕμνοῦμεν Πατέρα, Υἱόν, καὶ ἅγιον Πνεῦμα, Θεόν.</p> <p>Ἄξιόν σε ἐν πᾶσι καιροῖς ὕμνεισθαί φωναῖς αἰσίαις (Ps136:3) Υἱέ Θεοῦ, ζωὴν ὁ διδοῦς· διὸ ὁ κόσμος σε δοξάζει.</p>	<p><b>歡喜の光よ、</b> 不死(常生)なる父の聖なる光栄の 天の、聖なる、祝福された イイスハリストスよ</p> <p>日の入りに至って 暮れの光を見て 我等、讃め歌う、父と子と聖神、神を</p> <p><b>真に当たり、常に</b> 爾は慶びの聲を持って歌われる 父の子、生命を賜う者 ゆえに世界は爾を崇め讃む。</p>
--	---

### 聖大ワシリー 『聖靈論』

330年頃 - 379年

私たちの父たちは、タベの光の恵みを黙ったまま受け  
ないで、点つたらすぐに感謝するのがよいと考えた。し  
かしこの点灯の感謝の祈りのあの言は、どの師父のもの  
かを言うことはできない。それなのに人々は古くから  
この言葉を口にし、しかも「われら、父”と”子”と”神の  
聖神(聖靈)を讃える」と唱える人は不敬虔だなど言  
う人は一人もいない。 29:73

世紀のワシリーが「昔から」というのだから、それより前から歌われていたのだろうと推論されます。

ワシリーは『聖霊論』(聖霊、聖神についての本)の中で、三位一体の神学の論拠としてこの歌を引用しています。ここが正教会だと思うのですが、「昔から『父と子と聖神』と歌ってきたから、三位一体の神学は正統である」という理屈です。現代人は「ええ？それって理屈になるの？」と言いたくなるかもしれませんが、教会は「奉神礼の場で、礼拝の場で歌われるということは、間違いない」と考えます。奉神礼は神の居る場所です。神の前でウソはありえません。だから、信経も聖体礼儀の場で唱えられるのは正しい「信経」でなくてはならないし、そこで記憶される主教(つまり教会)の名前は、同じ正しい信仰を共有する人たちです。

### Slide 21 三位一体の神

歌詞に戻ります。だから、2番目の段落で重要なのは「父と子と聖神」の部分です。「父と子と聖神であるところの神」をはっきり伝えねばなりません。「神・父と子と聖神」ではありません。だから、「神」の後、ブレスしないまでも、あらためて「父と子と聖神を歌う」と歌うと、意味が正しく伝わると思います。

### Slide 22 歌詞

最後の段落。日本語の歌詞には「真に当たれり」アクションという部分がありませんが、大事な言葉です。聖体礼儀のアナフォラ(聖変化の部分)にも「当然にして義なり」という訳ですが、同じことばがあります。「常に福」も「アクション」(真に当たれり)で始まります。叙聖式の時、主教の「アクシオス」の宣言に続いて聖歌隊が「アクシオス、アクシオス、アクシオス」と歌うのを聞いたことありませんか。同じことばです。聖歌隊は信者を代表して歌っています。主教の呼びかけに対して、信者が「真に当たれり」「正しい!」「そのとおりだ」と宣言します。この「応答」、信者の合意は重要です。

**三位一体の神**

○神、父と子と聖神を歌う

かみちち  
×神父と子と聖神を歌う

**フォス・ヒラローン 歡喜の光「聖にして福たる」**

<p><b>Φώς ἱλαρόν</b> ἁγίας δόξης ἀθανάτου Πατρός, οὐρανόυ, ἁγίου, μάκαρος, Ἰησοῦ Χριστέ,</p> <p>ἐλθόντες ἐπὶ τὴν ἡλίου δύσιν, ιδόντες φῶς ἐσπερινόν, ὕμνουμεν Πατέρα, Υἱόν, καὶ ἅγιον Πνεῦμα, Θεόν.</p> <p>Ἄξιόν σε ἐν πᾶσι καιροῖς ὕμνεῖσθαι φωναῖς αἰσίαῖς <small>(Ps 135:3)</small> Υἱέ Θεοῦ, ζωὴν ὁ διδούς· διὸ ὁ κόσμος σε δοξάζει.</p>	<p><b>歡喜の光よ、</b> 不死(常生)なる父の聖なる光栄の 天の、聖なる、祝福された イイススハリストスよ</p> <p>日の入りに至って 暮れの光を見て 我等、讃め歌う、父と子と聖神、神を</p> <p><b>真に当たれり、常に</b> 爾は塵びの聲を持って歌われる 父の子、生命を賜う者 ゆえに世界は爾を崇め讃む。</p>
--	---



最後に、「世界は、宇宙は爾を崇め讃む」と歌います。ここには主日領聖詞「天より主を讃め揚げよ。148 聖詠」と同じ広がりがあります。私たちが神を讃えると、世界中の森羅万象が神をほめたたるという壮大なイメージです。日本語歌詞だと「敬虔の声」ですが、ギリシア語では、喜びの声をもって歌え、と言っています。古い修道院だと、この歌の少し前に長い棒を持ったロウソク係が出てきて、シャンデリアに一本一本火が灯され、王門が開くときに光にあふれます。日本でもここで電気をつけます。

3 世紀、4 世紀にどのように歌われていたかはわかりません。楽譜はもとより、覚え書きのような音楽記号が現れるのが 9 世紀、ある程度正確に音楽を再現できる譜面はそれから 2-300 年あとにならないと出てきません。特に、この歌とか、「聖なる神」とか、みながよく知っていた歌は、かなり後にならないと譜面がありません。みなが知っている歌はわざわざ書き記すことがなかったからです。みなが歌っていたのだから、覚えやすいシンプルな音楽だったと思われる。

これから聞いていただくのは、シナイ山のエカテリニ修道院のお祭りで、修道士たちが歌っているものです。メロディ自体は比較的新しいものだと思います。「叡智、謹みて立て」のあと歌われます。

<フォス・イラローン シナイ山>

この最初の「フォス・イラローン」というおじいさんの修道士さんの声、嬉しそうですね。「喜びの光よ」という気持ちがあふれていると思いませんか。

### Slide 23 入堂の歌

ところで「聖にして福たる」はいつも歌われるわけではありません。歌われるのは、次の日に聖体礼儀が行われる「祝いの日」だけです。日曜日は復活日の祭です。王門、天門が開き、聖入が行われます。対照的に、大斎の時、聖体礼儀も先備聖体礼儀もない平日、月曜日、火曜日、木曜日には歌われません。王門は閉じたままです。水曜日と金曜日は引き続き先備聖体礼儀が行われるので、王門が開き、聖入があり、歌われます。聖体礼儀がある、先備聖体礼儀があるということは、喜びの光、ハリストスが来られる、特別の祝いなのです。

正教会の奉神礼で、「歌われる」というのは祝いの表現です。最初にお話した「大頌栄」も同じで、祭の日は歌わ

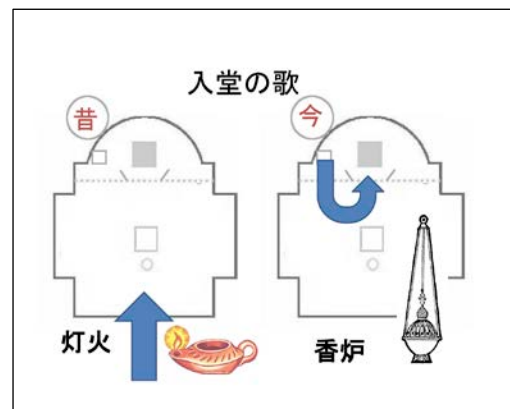


れますが、斎の平日には読まれます。面白いのは、受難週、聖金曜日早課では読まれるのに、聖大土曜日早課では歌われます。だんだん、復活祭に向かって気持ちが高まって行くのが感じられる構成になっています。

いろいろ調べるとこの歌は、晩に行われる聖体礼儀や先備聖体礼儀や夜の聖体礼儀ととても深い関係があることがわかってきました。先備聖体礼儀についてはまた別の機会に詳しくお話ししたいと思います。調べたい方はこの **Evening Worship** に詳しく出ています。

#### Slide 24

聖歌を歌うとき、その場面や背景を意識することはとても大切です。ここは「聖入」ですから「入場行進」です。昔は灯火を持った輔祭が外から聖堂に入ってくる場面でした。



今は堂役が先導して、司祭は香炉を持って至聖所から出てきて、至聖所に戻る動きですが、いずれにせよ「動く」場面です。動くということは動きを促すような歌が相応しいといえます。前に「奉神礼基礎講座」のときに「聖なる神」をとりあげて、同じことを言いましたが、実はこのまっすぐな「聖にして福たる常生なる・・・」はあまり動きやすくはありません。歌いながら歩いてみるとよくわかります。

北のアトスと言われるワラーム修道院に行ったときに、とても心に残った「聖にして福たる」があります。第1回でもご紹介しましたが、ズナメニイという古いロシア聖歌の旋律なのですが、とても単純、レミファミレ、レミファミレドレというシンプルな音型の繰り返しです。ビザンティン聖歌のようなイゾンという通奏低音が付いています。ハリストスである光がゆっくり運ばれてくる感じ、動きが感じられませんか。〈ワラーム〉

#### Slide 25 オビホード

日本で通常歌われているものは 19 世紀ロシアのもので、実は、四声合唱にするためにメロディが単純化されていて、ほとんどまっすぐで、最後にちょっとだけ音が変わるだけです。これを単旋律、単音にすると、ますます面白くありませんし、まっすぐなので歌詞のことが雑になります。



Slide 26

さきほどの、ロシアの古い聖歌、ワラーム修道院の「聖にして福たる」日本語にしてみました。それからずっと歌っています。数年たった頃、ワラーム修道院から修道士さんが来られて、一緒に晩課を祈りました。そのときの録音です。それを聞きながら、今回の講座を終えたいと思います。楽譜を出しますので、一緒に歌ってみてください。

## 聖にして福たる

ズナメニイ聖歌(ワラーム修道院)

聖にして福たる 常生なる 天の父の 聖なる 光栄の  
穏やかなる ひかり イイススハリストス や、  
われら 日の入りに いたり 晩の ひかりを見て、  
神 父と子と 聖 神を うた - う  
生 命を 賜う 神の子 や、  
なんじは いつも 敬 虔の 声にて 歌わる べし  
ゆえに 世界 は なんじ あか ぼ 讃 む